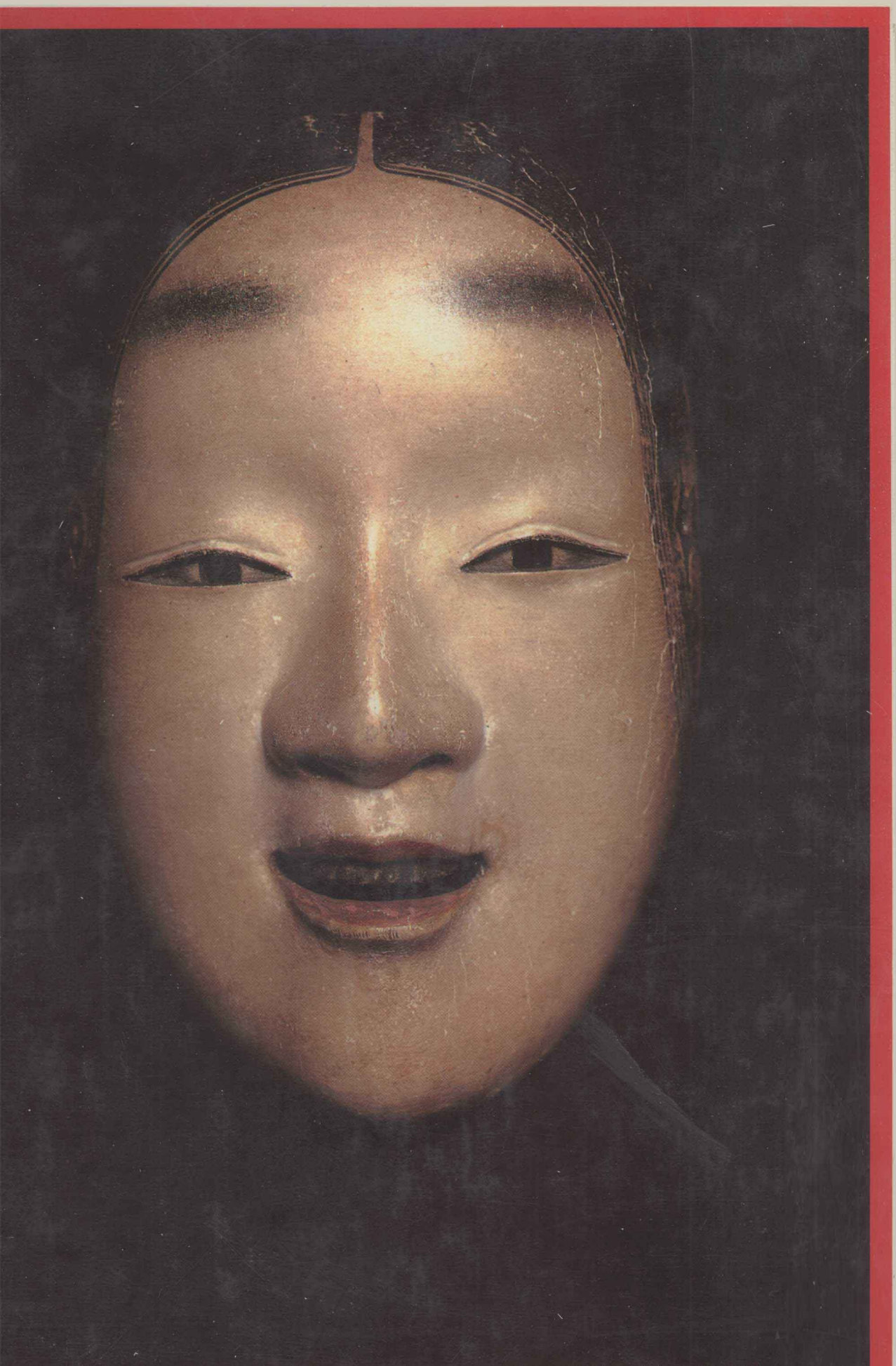


図説 日本の古典 12

能・狂言

図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授 神田秀夫	奈良国立文化財研究所長 坪井清足	学習院大 学教授 黛 弘道	
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授 伊藤 博	成城大 学教授 上原 和	学習院大 学教授 黛 弘道	
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授 小島瓔禮	文化庁 上原昭一	東京大学 助教授 笹山晴生	
第4巻／古今集・新古今集	東京大学 助教授 久保田 淳	美術史家 白畑よし	聖心女子 大学教授 目崎徳衛	
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授 片桐洋一	大谷女子 大学教授 伊藤敏子	聖心女子 大学教授 目崎徳衛	
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	学習院 大学教授 木村正中	美術史家 白畑よし	東京大 学教授 土田直鎮	
第7巻／源氏物語	東京大 学教授 秋山 虔	学習院大 学教授 秋山光和	東京大 学教授 土田直鎮	
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授 国東文麿	美術史家 梅津次郎	京都女子 大学教授 村井康彦	
第9巻／平家物語	神戸大学 名誉教授 永積安明	大阪大 学教授 武田恒夫	京都大 学教授 上横手雅敬	
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子大学教授 三木紀人	東京国立文化財研究所 宮 次男	東京大 学教授 益田 宗	
第11巻／太平記	早稲田大 学教授 梶原正昭	東京国立文化財研究所 宮 次男	京都大 学教授 上横手雅敬	
第12巻／能・狂言	東京大 学教授 小山弘志	京都国立博物館 切畑 健	大阪市立大 学名誉教授 原田伴彦	
第13巻／御伽草子	国文学研究資料館長 市古貞次	美術史家 高崎富士彦	東北大学 名誉教授 豊田 武	
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授 白石悌三	文化庁 佐々木丞平	学習院大学 名誉教授 児玉幸多	
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授 長谷川 強	東京大学 名誉教授 山根有三	学習院大学 名誉教授 児玉幸多	
第16巻／近松門左衛門	学習院大 学教授 諏訪春雄	大阪大学 助教授 信多純一	横浜市立 大学教授 辻 達也	
第17巻／上田秋成	国文学研究資料館教授 松田 修	名古屋大 学助教授 河野元昭	学習院大 学教授 大石慎三郎	
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授 神保五弥	東京国立博物館 小林 忠	立正大 学教授 北原 進	
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授 水野 稔	国立国会図書館 鈴木重三	東京学芸大学教授 竹内 誠	
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授 郡司正勝	東京国立博物館 小林 忠	成城大 学教授 西山松之助	

図説 日本の古典12 能・狂言

昭和55年5月20日 第1刷印刷
昭和55年6月9日 第1刷発行

著者代表——小山弘志 ©1980

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話—販売部 東京(03)238—2781
出版部 東京(03)230—6381
振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社
用紙——王子製紙株式会社
製本——中央精版印刷株式会社
文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが，落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。
0391-167012-3041

Printed in Japan

能・狂言

図説日本の古典 12

〈企画委員〉
東京大学教授　秋山　虔
国文学研究資料館長　市古貞次
学習院大学名誉教授　児玉幸多
早稲田大学教授　神保五弥
東京大学名誉教授　山根有三

〈第一二巻・編集委員〉
東京大学教授　小山弘志
京都国立博物館　切畑　健
大阪市立大学名誉教授　原田伴彦

集英社

目次

●カラー図版●世阿弥自筆『花伝第六花修』／能舞台「田村」「楊貴妃」「弱法師」「石橋」／狂言舞台「福の神」「髭櫓」「唐人相撲」／能装束・水辺雪持芦遊禽文様縫箔／厳島能舞台／花の小面／『寺院縁起絵』／小面屏風／光悦謡本／世阿弥自筆能本／禅鳳筆謡本／元和卯月本ほか謡本

●図版特集●
能のもうひとつの美しさ　切畑　健……20
秋草蒔絵謡本箪笥／蓬莱図中啓／鉄線花図中啓／花の丸図中啓／雲と雷光蒔絵螺鈿大鼓筒／雪持竹に虎蒔絵大鼓筒／海松に貝尽し蒔絵小鼓筒／扇子流し蒔絵小鼓筒／宇治橋蒔絵小鼓筒／四季花草丸蒔絵太鼓胴／群鹿蒔絵螺鈿笛筒

翁・能・狂言　小山弘志……24
「翁」―その変遷　現行の「翁」　翁と三番叟　能役者　能の諸役　能の作者　狂言　素謡・仕舞・囃子など

●図版特集●
さまざまな能　小山弘志・佐藤健一郎……37
「弓八幡」「頼政」「賀茂」「野宮」「松風」「葛城」「三井寺」「定家」「半蔀」「安宅」「葵上」「綾鼓」「道成寺」「善知鳥」「融」「船弁慶」

能―作品鑑賞　小山弘志……48
「高砂」「頼政」「野宮」「善知鳥」「自然居士」「三井寺」「景清」「砧」ほか

能面　佐々木進……77
能面の成立と展開　狂言面
孫次郎／節木増／翁／黒色尉／父尉面／癋見／大癋見／大飛出／小飛出／獅子口／尉（阿古父尉・小尉）

世阿弥の能と幽玄―その理論と実際　伊藤正義……90
能と幽玄　世阿弥の伝書　風姿論　能作論

●図版特集●
狂言いろいろ　小山弘志・佐藤健一郎……101
「夷毘沙門」「靱猿」「釣狐」「萩大名」「蚊相撲」「千鳥」「棒縛」「木六駄」「朝比奈」「花子」「宗論」「首引」

狂言―作品鑑賞　小山弘志……108
「末広がり」「棒縛」「朝比奈」「御茶の水」「米市」

説話から狂言へ　田口和夫……122
『沙石集』と狂言　信仰からの自立

●図版特集●
能狂言絵　木村重圭……133
『洛中洛外図屏風』／『豊国祭礼図屏風』／『観能図屏風』／『遊楽図屏風』〈相応寺屏風〉／『風俗図』／『四条河原図屏風』／『四条河原図巻』／『能狂言絵巻』／『能絵鑑』

能・狂言の形成とその社会的背景　原田伴彦……144
宇治猿楽と楽頭職　近江猿楽と惣村共同体　大和猿楽と武家・町民
狂言芸団の自立　地方への流布と手猿楽

能装束の美しさ　切畑　健……153
能装束の伝統性　能装束の文様
段に秋野虫籠文様唐織／段に檜垣に芥子文様唐織／段に秋草文様唐織／段替り花菱亀甲に鉞文様厚板／亀甲繋地に雲板文様厚板／段替り格子蒲公英文様厚板／斜段に石畳と松樹文様縫箔／紫苑に瓜蔓文様縫箔／檜垣に撫子文様繍入り摺箔／花籠と槍梅文様長絹／槍梅と七宝繋ぎ文様摺箔／桜折枝散し文様舞衣

能狂言装束の成立と展開　橋本健一郎……160
能狂言装束の成立　能狂言装束の変遷

能の発生と民俗藝能―大和山村を中心として　徳江元正……169
奈良のまつり　能のふるさと
題目立「厳島」／奈良豆比古神社の翁舞／丹生神社の田楽／薪能／壬生狂言／春日若宮おんまつり「松の下の式」「後宴能」／上鴨川住吉神社本祭の「翁」／添え翁／丹波篠山春日能

●図版特集●
絵入り謡本「百万」　切畑　健……185

近世社会の展開と能・狂言　原田伴彦……196
戦国大名と演能　石山本願寺と堺　奈良と京の猿楽　能・狂言の式楽化　能・狂言と庶民

能・狂言用語略解　佐藤健一郎……212

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

1　古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、各図版の解説には、その本文部分の執筆者があたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2　本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。原文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3　能・狂言独特の用語法については原則としてその慣例に従った。

4　参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

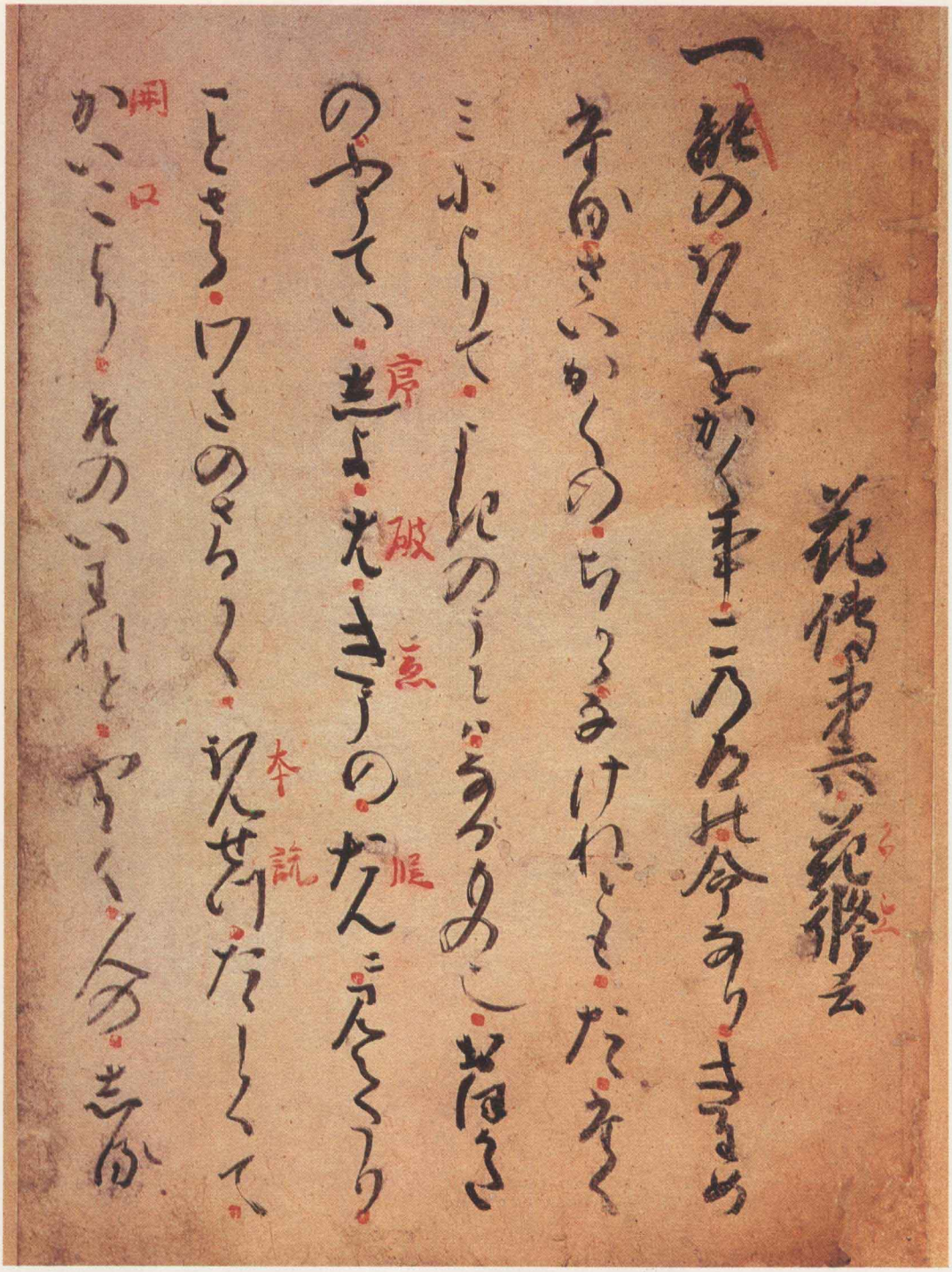
5　各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は一部をのぞいて略させていただいた。

6　本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第一二巻・執筆者〉
東京大学教授――小山弘志
武蔵野美術大学教授――佐藤健一郎
京都国立博物館――切畑　健
国学院大学教授――徳江元正
同志社大学講師――佐々木　進
兵庫県立博物館――木村重圭
大阪市立大学教授――伊藤正義
静岡英和女学院短大教授――田口和夫
大阪市立大学名誉教授――原田伴彦
神奈川県立博物館――橋本健一郎

〈装幀〉
後藤市三
〈レイアウト〉
宇喜多邦嘉
樋口英男

1



『花伝第六花修』・釈文

花傳・第六・花修云

一能の・ほんをかく事・この道の・命なり・きわめたる・さいかくの・ちから・なけれとも・たゝ・たくみによりて・よきのうには・なるもの也・おほかたの・ふうてい・しよ・は・きうの・たんに・見えたり・ことさら・わきのさるかく・ほんせつ・たゝしくて・かいこより・そのいわれと・やかて・人の・しる

序破急段

本説

開口

1　『花伝第六花修』本文冒頭――『風姿花伝』全七篇は，はじめからこの順序で書かれたのではなく，「第三」までは，一応，応永7年(1400)に成立したが，これと並行して胚胎していたものが「第四」以降それぞれの形に別々に結実し，また「第三」までに若干の増補が行なわれ，最終において現存の巻序に定まったものと考えられている(本書「世阿弥の能と幽玄」91ページ)。本図は世阿弥自筆本『花伝第六』の冒頭で，『第七別紙』『花習内抜書(くわしゆのうちぬきがき)』とともに古くから観世宗家に伝えられて来たもので，おそらく世阿弥の弟四郎(音阿弥の父)への相伝本であろう。成立年代は不明であるが，応永10年代の半ばごろか。本篇の内容は，「能の本を書く事」で始まっていることが示すように，能の作り方の基本を説いたもの。／東京・観世宗家

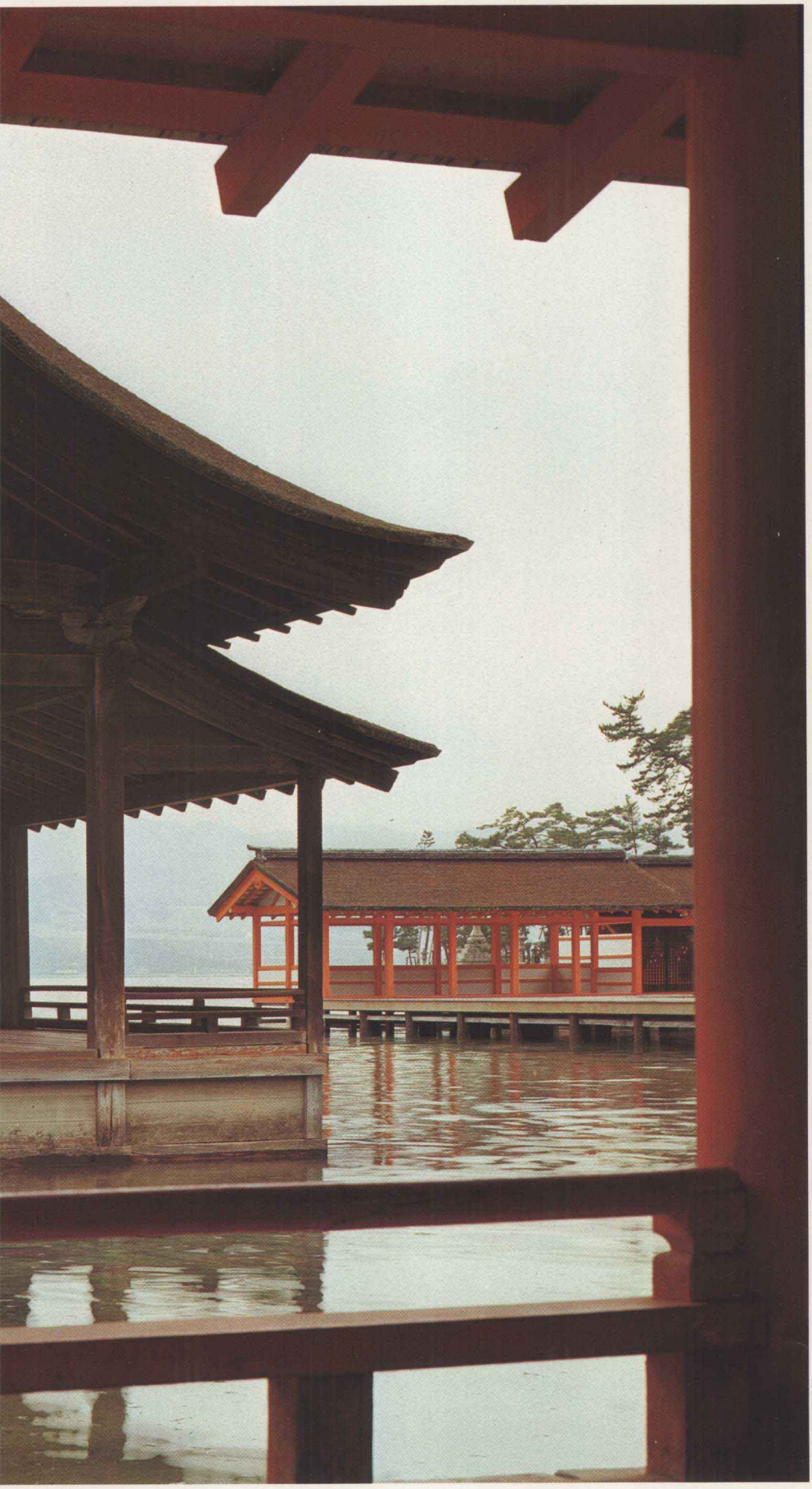
3 重文

3　水辺雪持芦遊禽文様縫箔――身幅が広く，袖幅の極端にせまい，近世初期小袖の典型をしめす。文様はいずれも当期特有の太い糸をおおらかに用いた繍技により，盛り上がるような厚味を見せる。芦の葉や水鳥の羽を大胆に繍いわける特殊な配色も，明繍の影響によるもの。文様の地間には金銀の箔をすりつめて豪奢であり，水鳥はまた童話の世界のような楽しさを見せる。当代縫箔中屈指の一領である。桃山時代。／岡山美術館

2　「田村」(たむら)後場――清水(きよみず)の観音の助力を得て，鈴鹿山の賊を退治した坂の上の田村丸の霊〔シテ〕。悪鬼を攻め亡ぼす田村丸のすがすがしく勇壮な姿である。『清水寺縁起』を中心に田村丸伝説を素材とした作品で，祝言的色彩の強い修羅物。〔シテ・金剛巌〕

2

4　「楊貴妃」(ようきひ)――安禄山の乱に殺された楊貴妃を忘れられず，玄宗皇帝は方士〔ワキ〕に命じてその魂を尋ねさせた。貴妃〔シテ〕は常世の国の蓬莱宮にいて，同じく皇帝を忘れられないでいた。貴妃は，世界を異にしてしまった悲しみのなかで，絶ちがたい愛の炎を燃やし，舞を舞う。『長恨歌』をもとにして作られた鬘物。本図は「玉簾(たますだれ)」の小書(こがき)付きの上演で，作り物に数多くの鬘帯がかけられ豪華な美しさを添えている。〔シテ・観世元正〕



5　**厳島神社能舞台**――海に浮かぶ舞台。橋掛りは吹き抜けで遠くの海が見える。現在，能を上演する時にはこれを板で閉ざし，裏側に切戸への臨時の通路を作るが，本来は切戸がなく，諸役すべて橋掛りより登場していたのであろう。地謡座の上の庇(ひさし)は，これがあとで付け足された痕跡を示すものとも見られ，舞台の古形をうかがい知ることができる。笛柱が独立して立っているのは，一般の舞台と異なる。室町時代末期，毛利元就の時代の創建と伝える。／広島県・厳島神社

5 重文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

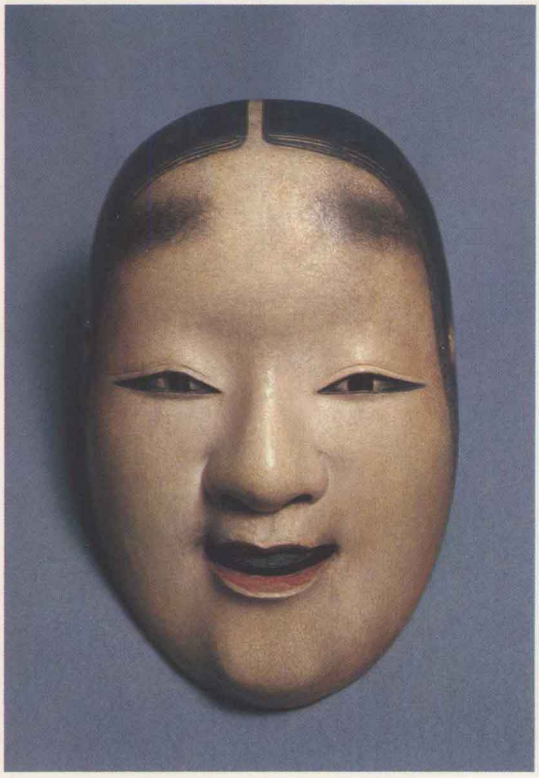
6　「**石橋**」(**しゃっきょう**)**後場**――文殊の浄土清涼山で牡丹に遊び戯れる親子の獅子〔シテ・ツレ〕。“万歳千秋(ばんぜいせんしう)”と御代を祝福して舞い納める。前場は，寂昭法師〔ワキ〕が入唐し，清涼山の石橋のかたわらで童子〔前シテ〕からそのいわれなどを聞くというもの。常は赤頭の獅子ひとりの登場であるが，前シテが老翁の姿で登場したり，獅子の数にちがいがあったり，流儀・小書によって演出の異同が多い。切能。〔シテ・梅若六郎　ツレ・梅若景英＝現・六之丞〕

7

7　**後宴の能**――春日若宮おんまつりが済んだ12月18日の午後，御旅所前の神前に敷舞台を設け，前夜の御旅所の儀とは向きを逆に，南を正面とし，御旅所を背にして，能三番(金春流)と狂言二番(大蔵流茂山家)とが演じられる。神に対する法楽の催しではなく，若宮おんまつりを終えたことに対する慰労の意味もこめられているのであろう。やや寒いが，野天で鑑賞する能は，今日の屋内の能楽堂で観る能とはまったく違う愉しい雰囲気にひたることができる。本図は「弱法師」(よろぼし)のシテ，難波四天王寺の門前で狂う俊徳丸。

6

8



8　**花の小面**――室町時代初期に活躍した竜右衛門の作と伝えられる小面を3面入手した豊臣秀吉は，それぞれ「雪の小面」「月の小面」「花の小面」と名付けて愛蔵した。のち雪を金春大夫に，月を徳川家康に，花を金剛大夫に与えたとされている。現在，月の所在は不明となり，雪は京都の金剛家に所蔵されている。雪と花の表情は微妙な違いをみせるが，まことに清楚な美しさを湛えている小面である。

10 「**髭櫓**」(**ひげやぐら**)——髭自慢の夫が髭を認められて大嘗会の犀の鉾の役を仰せつかる。妻は苦しい生活のなかで衣裳の用意などできないと，近所の女房たちを引きつれ，大髭を抜きに来る。本図は，一曲の最後の場面で，妻が大毛抜きで夫の髭を抜き取ろうとしているところ。狂言の女房たちはなかなか行動的である。〔シテ夫・野村万之丞　アド妻・野村万作〕

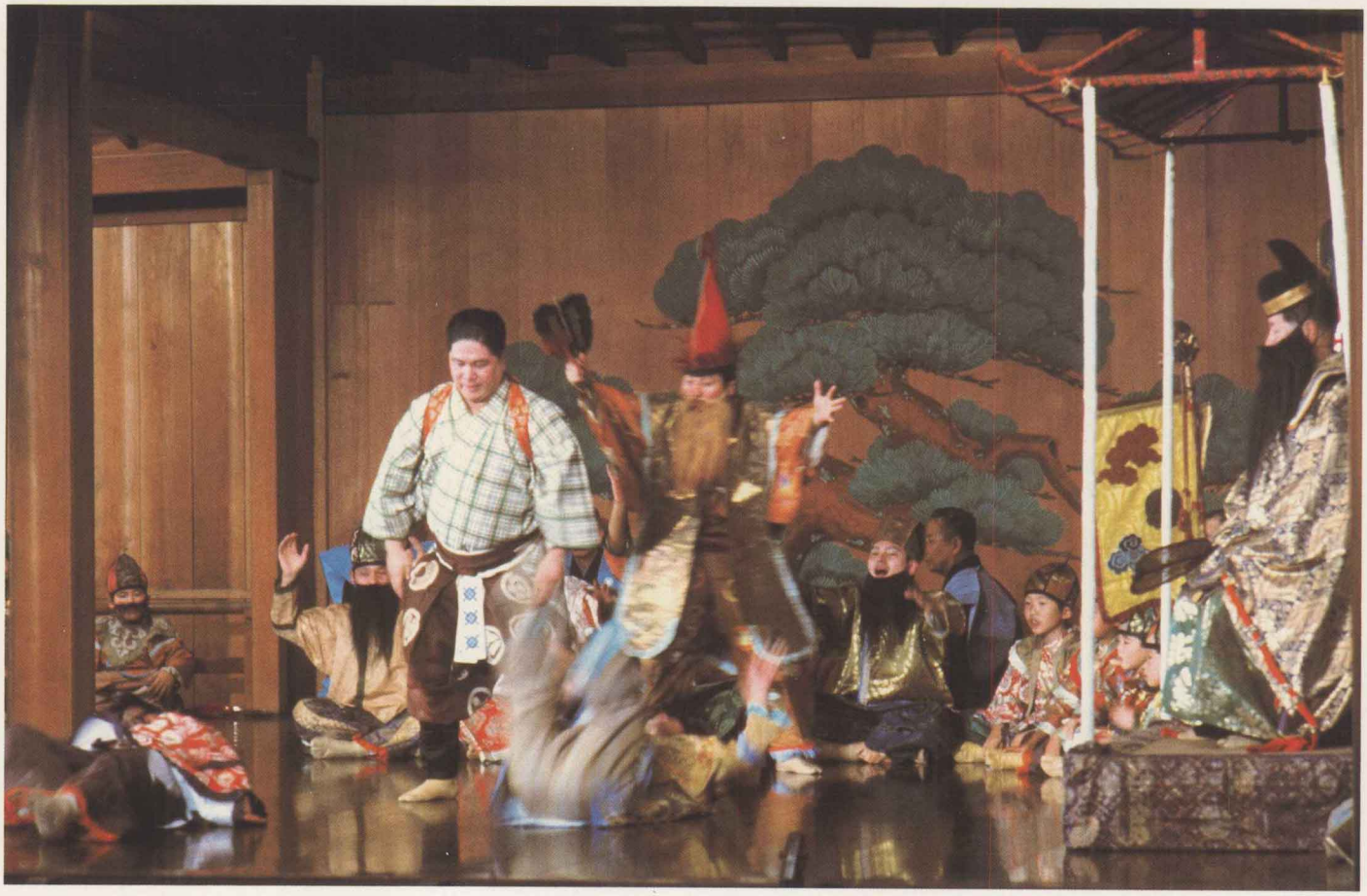
9 「**福の神**」(**ふくのかみ**)——ふたりの男が，年の夜に福の神へ参詣し，富貴を祈願して「福は内へ，鬼は外へ」と豆をまく。福の神が笑いながらあらわれ，神酒(みき)を所望し，彼らの願いに対して，富貴になるには早起きや夫婦愛が大事であると説き，一笑いして一曲を閉じる。庶民に信仰された福神の狂言で，他に夷(えびす)や大黒・毘沙門も，狂言には登場する。脇狂言。なお本図は三輪神社の假設舞台での上演である。〔シテ福の神・茂山千作〕

9

11 「**唐人相撲**」(**とうじんずもう**)——唐土の皇帝の前で日本人の相撲取りが帰国の名残に相撲をとり，相手の唐人を次々に投げとばす。最後には皇帝も相撲をとるが，負けそうになって，下官たち皆々で抱え上げて幕に入る。本図は，下官たちを投げとばす日本人。唐人は唐音(とうおん)という不可思議な言葉を使い，通辞がその通訳をする。大蔵流では「唐相撲」(とうずもう)という。〔シテ皇帝・三宅藤九郎　アド日本人・和泉保之＝現・元秀　アド通辞・野村万之丞〕

10

11



12

13

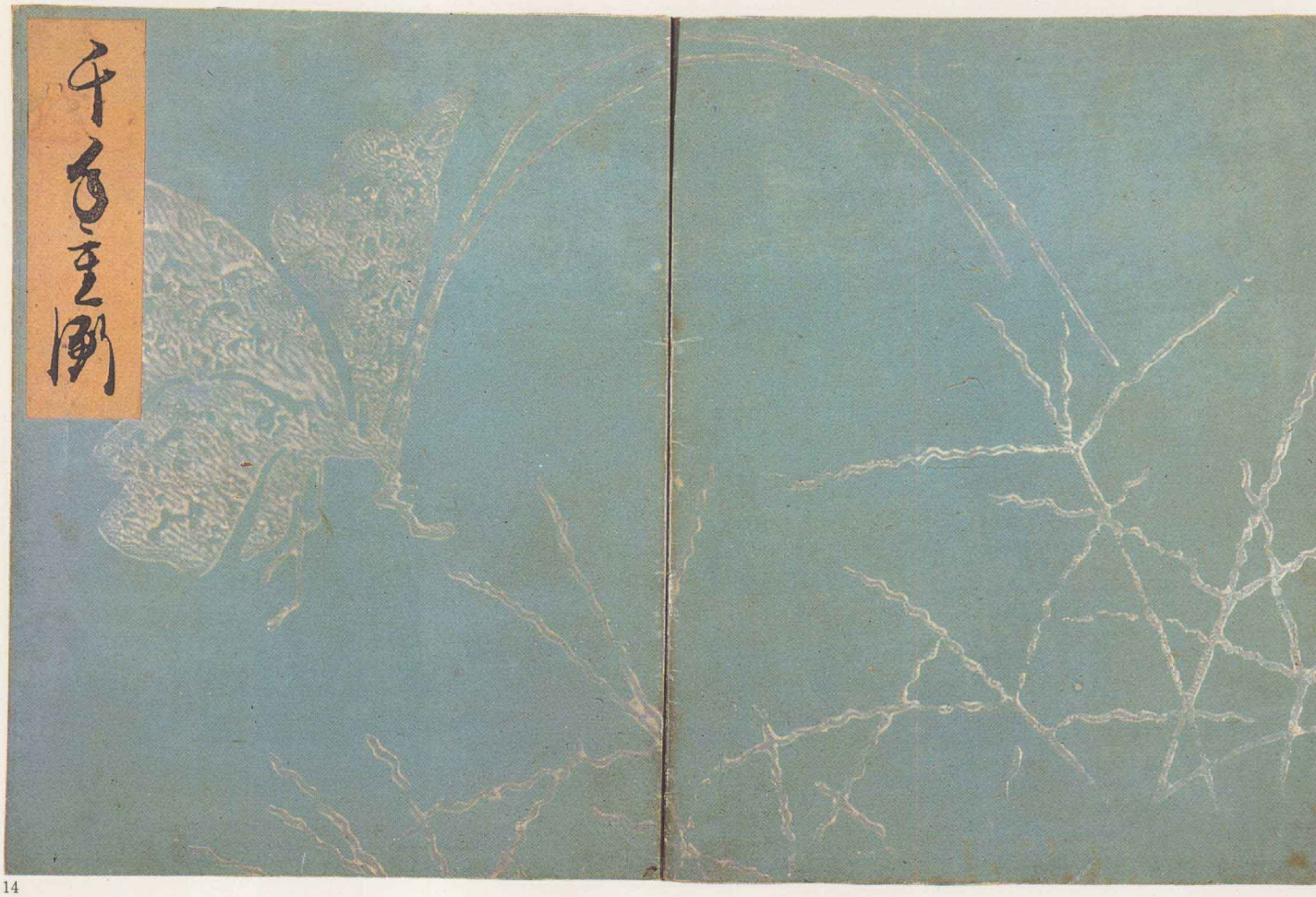
13　延年図〈『寺院縁起絵』部分〉——この図は『欧米蒐蔵日本美術図録』(繭山順吉編)に「曼荼羅」として紹介されているが，寺院名は明らかではない。室町初期頃の絵仏師系の手になるもので，もとは何幅か連幅であったと思われる。図版は同図の下の部分で笙や太鼓の楽人の伴奏で延年を舞っているところであろう。延年は古く平安時代末から鎌倉時代初期にかけて，各地の寺院で盛んに行われた。中世以降次第に衰えて行ったが，この図は，そうした当時の様子を伝えるものである。／シアトル美術館

解説　1,12　小山弘志
　　3　　切畑　健
　　7　　徳江元正
　　8　　佐々木進
　　13　　木村重圭
　　14　　伊藤正義
　上記以外
　　佐藤健一郎

12-D　12-C　12-B

12　小面(しょうめん)屏風――縦30.8cm，横全長87.6cmの小さな六曲屏風。各扇3段にそれぞれ三つずつ，6扇総計54の小さな能面の模型がかけられ，折りたたむために，縁(ふち)を各1.9cmの高さで枠組みしてある。能面のひとつひとつは縦約2cmの小さなものだが，木彫に実際の能面同様の彩色を施した精巧なもので，面紐は実物が使われている。専門の面打(めんうち)の製作したものであろうか。能面の右に，その名称を記した短冊型の紙が，また下に，それを使用する能の作品名を記した色紙型の紙が，それぞれ貼ってある。最左扇の猿・乙(おと)・虚吹(うそふき)・狐の4面は狂言面。狐に「つり狐」「こんくわい」の二つの曲名が記されているが，これは同曲で，前者(釣狐)は大蔵・和泉両流，後者は鷺流での呼称である。拡大した3面について言えば，釣眼(つりまなこ)は「嵐山」「賀茂」などの後シテ蔵王権現・別雷の神といった豪快な神の面，猩々は「猩々」の専用面(下に「一番」と記されている)，中将は「朝長」「忠度」「清経」「融」など主として公達(きんだち)に使用される面である。この屏風は加賀前田家の所蔵，製作年時は不明であるが，おそらく江戸後期のものであろう。能が大名家において親しまれていたことを示す一例と言える。／東京都・前田育徳会尊経閣文庫

14　光悦謡本「千手重衡」(せんじゅしげひら)――江戸時代ごく初期，国文古典の書物が，豊麗な光悦流書風の古活字版として刊行された。それを嵯峨本・角倉(すみのくら)本・光悦本などと称するが，わけても謡本は，表紙・料紙等に色々の染色紙や斬新な意匠の雲母刷模様を用いて，造本史上画期的な豪華本を出現させた。列帖装の特製本・上製本・色替り本の各種や，袋綴装の別製本・並製本各種など，多種類の光悦謡本が刊行されているが，本図は，表紙の意匠が最も多彩な上製本のうち，蝶とメヒシバを組み合わせた意匠の一例である。／法政大学能楽研究所・鴻山文庫



14

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com